

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

——エジプト, カイロ大学・アル・ディーワーン, アラビア語, H22. 12. 20-H23. 03. 21——

平成 21 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士前期課程 3 回生
二ツ山達朗

自身の研究テーマについて (～600 字)

北アフリカのチュニジアでは、オリーブ栽培がフェニキア時代からなされ、歴史的に主要な生産物となってきた。オリーブは経済的な役割のみならず、儀礼や祭事にも使用されるなど、民衆の精神的な側面においても重要な意味を持っており、民衆の信仰とも深い関係がある。

これまでの北アフリカの民衆の信仰理解における先行研究では、聖者信仰を対象とした研究が活発になされ、神と民衆との間を介在する者として聖者の役割が認められてきた。他方で樹木や自然物などへの崇敬は、フェティシズムやアニミズムに由来する「原始宗教の残滓」とみなされ、イスラーム的ではない信仰と解釈されてきた。

研修者は自然物への崇敬に着目し、それらのイスラームの信仰における役割を再考察する。具体的にはチュニジア南東部の地域社会で生産されているオリーブに着目し、現地住民にとってオリーブがどのような精神的意味を持つのかという観点から調査をしている。この調査を通じて、オリーブが食料や薬、現金収入となるだけでなく、人々にバラカ（神の恩寵）を与える存在であり、神の力を具現化するという意味を持つモノであることを考察した。

このような調査を通じて、聖者以外にも神と人との間を介在するモノの存在を示し、民衆のイスラーム理解における新しい視座を提示することを研究目的としている。

研修言語の概要 (～200 字)

研修者のフィールドではチュニジア方言（アンミーヤ）が使用され、正則アラビア語（フスハ）とは単語などにおいて若干異なる語が使用される。しかし、文法や一定数の単語はフスハと共通しており、チュニジアの現地住民もフスハを理解することから、フスハの習得に努めた。また、フスハは書き言葉としてアラブ世界でも共通して使用されているため、文献講読において地域や世代を超えて汎用性があるフスハの習得を目指した。

語学研修の内容について (～600字)

研修者はカイロのアル・ディーワンセンター（ガーデンシティ校）において1ヶ月強、その後エジプトでのデモが激化した為ヨルダンに退避し、ヨルダンの首都アンマンのカシッド語学学校で1ヶ月弱の語学研修を受けた。共に上述したフスハの読み書き、音読、読解を重点的に学習した。両校とも基本的に授業での使用言語、解説はアラビア語であり、アラビア語でアラビア語を学ぶことにより、効果的

な習得ができた。

アル・ディーワンセンターにおいては午後の4時間×週5日の授業を受けた。テキストは学校の用意していたものを使用した他、教師が個別に用意した物語文などにも取り組んだ。その他、教師と昨日の出来事や自身の研究の内容、日本とエジプトとの文化的差異などについて会話したことが、語学習得に有用に働いた。また、近年学校が開発に取り組んでいるCD-ROMを使ったテキストも使用した。日々出される宿題も一定量あったので、帰宅後や翌日の午前中は宿題や予習、復習に取り組んだ。教師はこちらを楽しませてアラビア語習得をしてもらおうという姿勢があった。

アンマンのカシッド語学学校では、午後の3時間×週5日の授業を受けた。テキストは学校の用意したテーマ別の日記文などであり、教師と共に読み進めた。読み進める際に、こちらの文法が曖昧なところがあれば、そのつど解説をしてもらい、新しい単語については用法を教えてもらうなどの指導を受けた。

研修期間中に印象に残った体験や経験（～400字）

研修期間中に印象に残ったことは二点ある。一点目はホームステイ先のホストがナクシュバンディー教団に属しており、彼を通じて様々なイスラーム神秘主義教団（タリーカ）の活動に参加できた事である。週一回行われる集会（ハドラ）に参加した他、彼とフセインモスクへ聖者廟参詣にも出かけた。エジプトのタリーカについて文献では知っていたが、実際に体験したことの無い研修者にとっては、これらの活動に参加したことはとてもよい経験となった。

二点目にエジプトの政変を体験できたことである。1月25日に始まるタッハリール広場でのデモ・抗議活動から、エジプトを退避するその日まで様々なかたちでエジプト民衆と会話をし、エジプトの国を憂い、独裁政権に対して抗議する彼らと同じ時を過ごした。彼らと様々な議論をしたことは、今後研修者が中東地域研究と関わっていく上でも、大きく影響を受けた。

目標の達成度や反省点について（～400字）

達成度については、正則アラビア語（フスハ）を用いた会話に慣れたことが大きな点としてあげられる。研修者はチュニジア方言についてはある程度の習得をしていたので、研修初期はチュニジア方言が抜け切れなかった。しかし、チュニジア方言とフスハの違いを意識的に頭に入れることにより、すぐにフスハに慣れることができた。

反省点に関しては、日本でも学べる文法事項を、現地語学学校でも再学習した授業があったことである。このことは研修者が研修前に基礎事項をより完璧に習得しておくべきであったこと、現地の教師に「より実践的な学習がしたい」という要望を早めに出すべきであったこと、などの理由があげられる。

写真：授業風景（左）、授業後に先生と（中央）、先生と事務スタッフ（右）

